世界名作劇場

小公女（プリンセス）セーラ

『メルキセデックの家族』

第 17 話

制作 日本アニメーション
フ ジ テ レ ビ

脚本　椋露地桂子

登場キャラクター

セーラ・クルー

ミンチン院長

アメリア先生

アーメンガード

ラピニア

ジェシー

ガートルード

ピーター

モーリー

ジェームス

1

ミンチン女子学院・台所（夜）

料理の材料を揃えているジェームス。
モリーが、最後の点検をして回る。
鍋のみがき具合、流しの後始末、火の元——。
その都度、緊張して見守っているセーラ。
モリー、しつこく見回っているが、どうやら合格したらしい。
ジェームス「どうやら今日は、ちゃんとやれたようだ……（セーラに）いいよ、もう寝んでも」
セーラ、ほっとして、
「おやすみなさい」
二人にあいさつして行きかける。
そのセーラを見ていたモリーの目が、おや？となる。
モリー「セーラ、おまち！」

セーラ「？」

モリー、つかつかとセーラのところへくる。

モリー「ポケットの中のものをお見せ」

小さくふくらんでいるセーラのエプロンのポケット。

セーラ「（ハッとして）――」

反射的に、ポケットを押える。

モリー「お見せったら！」

いきなりポケットに手をつっこみ、中のものをつかみだしてしまう。

モリー「何だい？これは」

一瞬、あっけにとられているモリー。

そのモリーの手にあるのは、食べ残しのパンである。

ジェームス「（気ずいて）どうしたんだ？」

モリー、わざとらしくパンのかけらを見せて、

モリー「セーラが、こんなものを部屋へもちかえろうとしたんだよ」

ジェームス「そいつは、生徒さんたちの食べ残しのパンじゃないか？」
モリー「（頷いて）私が、他のものと一緒に捨てといた奴なんだけどね」
ジェームス「（セーラに）そんなもの持ち帰って、どうしようってんだい？」
セーラ「……」
モリー「（わざとらしく）まさか、こんなものまで食べようってんじゃないだろうねえ……」
意地悪い目で、じろじろセーラの顔のぞき見る。
セーラ「（くつじょくに耐えきれず、思わず）違います！」
モリー「へえ……（と、信じてない様子）」
セーラ「（必死に）ネズミに……」
モリー「ネズミ？」
セーラ「ネズミにあげようと思ったんです」
モリー「（とたんに）いい加減なこと言うんじゃないよ！どこの世界

にネズミにえさやる者がいる、どうせ、こっそりかくれて食べるつもりなんだろ？」

セーラ「本当です、屋根裏に……」

必死に言いかけるが、モリーは、聞く耳もたず。

モリー「いいかい、ここにあるものは、勝手にもちだしたら承知しないからね！」

言い捨てて、とりあげたパンのかけらを、ゴミの中に捨ててしまう。

セーラ「……」

いかりとくつじょくに、握りしめたこぶしがふるえている。

「終りました」

と、入ってくるベッキー。

その場の様子に、？……となる。

その二人に、聞こえよがしにモリーとジェームスがしゃ

べる。

モリー「かってのプリンセス様も落ちたもんじゃないか！食べ残しの
パンをネズミにやるなどと嘘までついてさ！」

ジェームス「それもこれも、父親が借金残して死んじまったせいだ」

セーラ、耐えられなくなる。
顔をおおって、部屋をとびだしていく。

ベッキー「（思わず）セーラさん……」

と、見送って、モリーとジェームスを激しい抗議の目で、
見返した。

2 同・屋根裏部屋（夜）

セーラ、くつじょくにふるえながらきて、中へ入ってー

3 同・中

──くる。
後手にドアをしめるセーラ。
耐えていた悲しみがふき上げる。
父の写真の前に、くず折れるセーラ。
セーラ「お父さま……」
さすがに、涙がこぼれる。
そんなセーラを、やさしい笑顔で見守っている写真の父。
セーラ──。
父の笑顔を見ているうちに、次弟に落ちつきをとりもどす。
セーラ「(写真) わかったわ、お父さま、こんなことでくじけちゃダメって、そうおっしゃりたいのね」
笑っている写真の父。

セーラ「ええ、もう大丈夫、お父さま、だから心配しないで……」
気持をふっきると、エミリーのところへいく。
エミリーを、抱きあげるセーラ。
セーラ「ただいま、エミリー、元気にしてた？」
エミリー――。
セーラ「（いつもの調子で）今日は、何をしたの？」
エミリー「……」
セーラ「あててみましょうか」
エミリー「……」
セーラ「メルチセデックが、きたんじゃない？」
エミリー「……」
セーラ「（自分の思いで）かくしても私にはちゃんとわかるんだから」
突然、ノック。
そして声。
「お嬢さま」

セーラ「ベッーキー」

いそぎドアへ。

4

同・部屋の外

ドアあけるセーラ。

いそいで追ってきたらしく、息を切らしているベッキー。

セーラ「どうしたの？」

ベッキー「これを」

と、エプロンの下にかくしもってきたパンのかけらをそっと差し出す。

セーラ「（思わず）ベッキー……」

ベッキー「だって、せっかくお嬢さまがネズミにあげようと思ってひろったものまで取り上げるなんて、ひどすぎます」

口とがらして、ふんがいしている。

セーラ「（こみ上げる思いで）ありがとう、ベッキー、あなたには、
何て感謝したらいいか……」
ベッキー「（照れて）感謝なんて……こんなこと、お安い御用です」
嬉しそうに笑って、ピョコンと頭下げ
ベッキー「お寝みなさい」
と行く。
セーラ「お寝み、ベッキー、本当にありがとう……」
一杯の感謝で見送るセーラ。

5
同・中（夜）

パンのかけらを手に入ってくるセーラ。
さっそく、壁の穴のところへいく。
そっと様子を見るセーラ。
穴の中は、静まりかえっている。

セーラ「（小声で呼んでみる）メルチセデック……メルチセデック……」

様子をみながらまつが、かえってくるものはない。

セーラ、あきらめずに、もう一度呼ぶ。

セーラ「メルチセデック……セーラよ、セーラが、お夕食もってきてあげたのよ」

が、穴の中は、しんと静まりかえっている。

セーラ「（ひとりごとで）どうしたのかしら、……」

つぶやきながら、ベッドにもどってまつが、やはり、穴の中はシンと静まり返っている。

セーラ――。

つかれが出たのか、いつの間にか、うたた寝を始めている。

と――。

ガソ、ゴソ……という音が次第にはっきりしてきて、チ

ュ、チュ、チュというネズミの鳴き声。
ハッとめざめるセーラ。
鳴き声をきいたのだ。
セーラ、思わず、
セーラ「メルチセデックだわ！」
とびおき、見る。
すでに、ネズミの姿はなく、同時に、穴の近くに置いた
パンのクズもなくなっている。
セーラ、確かめて、何となく気落ちしてしまう。
セーラ、考えているが、ふと思いついて、穴へ向かい口
笛をふいてみる。
セーラ「（小さく）チュ、チュ……チュ、チュ、チュ……」
パンをちぎって置きながら、くり返すセーラ。
と、シーンとした中で、突然、ガサ、ゴソ……と、もの
の動く気配。

セーラ――。
思わず、微笑がこぼれ、夢中になって又、口笛をふく。
ガサ、ゴソ……という音が、次第に近ずき、やがて、闇の中に、二つの目が光る。
そうして、次第に、姿を現わすメルチセデック。
見守るセーラ。
やさしく語りかける。
セーラ「メルチセデック、あなた、何でそんなに用心しているの、私は、あなたの友だちよ、何も心配しないでいいのよ」
パンのクズを少しづつ置いてやる。
セーラ「さあ、お食べ！」
メルチセデック、立ち上ったりして、遠くを見る風。
そして、ようやく、パンに近ずき、食べ始める。
セーラ「そうそう、そうして、奥さんや、子供たちにももってってあげ」

やさしく語りかけながら、見守るセーラ。
突然、ノック。
セーラ「?!」
と、ドアの方を見る。

6 同・ドアの外

アーメンガードが、寝巻の上にショールをまきつけ、小さなローソクを手に、不安気にノックしている。
「誰れ?」
と、いうセーラの声。
アーメンガード「(声ひそませ)アーメンガードよ」
ドアあいて、驚いたセーラの顔。
セーラ「どうしたの?」
アーメンガード「おしゃべりがしたくって……」

そして、しきりに部屋の中をうかがう。

アーメンガード「ね、それより中に誰れかいるの？」

セーラ「（え？となり）ううん……」

アーメンガード「でも誰れかとお話してるみたいだったわ、話してる声がきこえたもの」

セーラ――。

ああ……と気ずき、

セーラ「（ちょっと、いたずらっぽく）実はお友だちがいるのよ」

アーメンガード「お友だち？」

セーラ「そう、あなたにも紹介してあげるわね」

けげんなアーメンガード。

7 同・中（夜）

「ネズミ?!」

と、思わずきき返したアーメンガード。

アーメンガード「（いかにも気味悪そうに）ネズミって、あのヒゲをピンとたてた……目のギョロギョロしたあのネズミ?」

セーラ「そうよ、そのネズミよ」

アーメンガード「そうよって……ど、どこに……」

身をふるわせて、周囲を見る。

どこにもメルチセデックの姿はなく、ちぎったパンだけが残されている。

セーラ、そのパンクズを集めながら、

セーラ「あなたが来たので、こわがって逃げちゃったのよ」

アーメンガード「（胸なでおろし）じゃ、逢わずにすむのね」

セーラ「ダメよ」

アーメンガード「どうして！私は、ネズミなんて大嫌い！」

セーラ「メルチセデックは、とても可愛いわ」

アーメンガード「メルチセデック?」
セーラ「ネズミの名前よ」
アーメンガード「名前まであるの?!」
セーラ「そうよ。だってお友だちですもの、名前がなきゃ、可哀そうでしょう」
アーメンガード「(目を丸くして)そ、そりゃそうだけど……」
セーラが呼ぶ、チュ、チュ、チュ……
その時、ガサ、ゴソ……と中でメルチセデックの動く気配。
セーラ、いち早く気づいて、アーメンガードに、シッと合図。
アーメンガード、うろたえて、ベッドの上にはい上る。
セーラ「チュチュ……チュチュ……」
やさしく呼んでやる。
動く気配が近づいて、やっと、顔のぞかせるメルチセデッ

ク。

アーメンガード「あ……」

小さく声をもらし、あわてて自分の口を手で押える。

一方で、セーラも、あ……と目を輝かせている。

メルチセデックにつづいて、妻と子供たちが、姿を見せたからだ。

セーラ「まァ、今度は奥さんや子供たちもつれてきてくれたのね」

メルチセデック――。

そしてその家族――。

用心深く、様子をみている。

セーラ、いそぎ、パンをちぎってそこらに置き、自分はそっとベッドに下る。

目を丸くしているアーメンガード。

セーラ、アーメンガードのそばに、ひざを丸めて坐り、メルチセデックたちを見る。

アーメンガード「（そっと）ねえ、あれは何？」
セーラ「家族よ、メルチセデックとその奥さんと子供たち」
アーメンガード「まァ……」

驚きの目で、ネズミたちを見る。
二人が見守る中、メルチセデックは、ようやくそろそろパンに近づいて、それを手にする。
そして、大丈夫だよ……とでも言うように、家族の方をふりかえり、食べ始める。
妻と子供たちが安心したように出てきて、メルチセデックにならい、自分たちも食べ始める。
時々こちらを気にしながらも、熱心に食べているネズミたちの姿に、いつかこわさも忘れて見入っているアーメンガード。

セーラ「メルチセデックは、とても家族思いなのよ。ひとりで来るときには、いつも自分は小さいのしか食べないで、大きいもの

は家族のために持って帰るのよ」

アーメンガード「メルチセデックって、とてもえらいのネ」

セーラ「だって、メルチセデックは、父親ですもの！」

アーメンガード「何だか、人間と同じみたい」

セーラ「そうね、ネズミだって人間と同じなのかもしれないわね」

アーメンガード感心している。

アーメンガード「今度くる時は、私もきっと何かメルチセデックのためにお土産を持って来てあげる」

セーラ「きっと、大喜びするに違いないわ！」

アーメンガード、うれしくなって、大きな声で笑い出し、あわてて口をおさえクックックックッと忍び笑い。

セーラも、うれしい。

（C M）

8 ミンチン女学院・全景（朝）

9 同・台所（朝）

朝のあわただしいひととき。

モリーが、セーラとベッキーを追いつかっている。

モリー「セーラは、早くそこのかたづけすましておくれ、ベッキーは、そろそろ生徒さんたちの食事が終る時間だよ」

「はい」

「はい！」

やりかけていた皿洗いの手元をいそぐ二人。

10 同・食堂（朝）

「ごちそうさま」

と、次々に食事を終る生徒たち。
監督しているミンチン、アメリア。
ミンチン「（見回して）皆さん、終りましたか？」
一　同「はい」
ミンチン「よろしい、では、部屋へもどって授業の準備をするように」
解き放たれたように、いっせいにワーと席をたつ生徒たち。
アーメンガードも立つ。行こうとして食卓の上の誰れかの皿に、パンが残っているのに気がつく。

11

フラッシュ

セーラの部屋で、メルチセデックたちが、熱心にパンクズを食べる姿——。

12

もとの食堂

アーメンガード、目を輝かせ、パッとパンをつかみ、ポケットにつっこもうとして、ハッとする。

目の前に、思いがけず、ラビニアが立っていたのだ。

アーメンガード「（思わず）ラビニア……」

ラビニア「（固く）何の真似なの？」

ジェシーとガートルードもよってくる。

「どうしたの？」

「何があったの？」

ワアワア騒ぎたてる。

生徒たちが、部屋を出ていくのを見送っていたミンチンが気がつく。

ミンチン「どうしたのです、ラビニア。そんなところで何をしてるの？」

一瞬、シンとなる一同。
ちょうど皿を下げにきたベッキーが、そんな様子をけげんに見て――。

13 同・台所

皿を下げてもどってくるベッキー。
見回すと、セーラの姿がない。
仕事しているモリーとジェームスに
ベッキー「あの、セーラさんは?」
モリー「セーラなら、市場へ買いものに行ったよ」
ベッキー「そうですか……」
モリー「(見て)何だい?」
ベッキー「いえ……」

ごまかして、そそくさと洗い場へ。

14 市　場

買いものしているセーラ。

「お嬢さま！お嬢さま！」

と呼ぶ声に、ふと見ると、ピーターが近くの肉屋の店先から呼んでいる。

セーラ「ピーター……」

とびだしてくるピーター。

ピーター「（何故かひどく嬉しそうに）まってたんですよ、お嬢さ……（言いかけて気がつき）セーラ」

セーラ「（笑うが）何か用だったの？」

ピーター「これ」

ひょいと後手にもってたものを差しだす。

もぎたてのつややかな大きなりんご。

セーラ「まあ、きれいなりんご」

ピーター「今朝早く、いつも果物運んでくる人にもらったんですよ、それで、セーラにも分けてあげようと思って」

セーラ、受けとり

セーラ「ありがとう」

思わず、りんごにほほずりする。

ピーター「エヘヘ……」

と、いかにも嬉しそうだ

ピーター「とりたてだから、きっとおいしいですよ！」

明るく言って、もとの店の方へかけもどっていく。

セーラ「ありがとう、ピーター！」

りんごを手に、明るい笑顔で見送っているセーラ。

ミンチンの厳しい声が、かぶる。

「何故です、何故、こんなことをしたのです！」

15

ミンチン女学院・ミンチンの部屋

呼ばれているアーメンガード。

そして、例の食べ残しのパンを前に、いかりも現わなミンチン。

二人の間で、オロオロしているアメリア。

ミンチン「（アーメンガードに）あなたは、りっぱなレディになるために、この学校へきてるんですよ、それがこともあろうに、人の食べ残したパンを拾うなんて……」

アーメンガード「（うつむいて）……」

ミンチン「そんなことをするには、それなりの訳があるはずです、その訳を、はっきりおっしゃい！」

アーメンガード「ごめんなさい……」

ミンチン「ごめんなさいでは、わかりません！」

アーメンガード「……」

ミンチン「アーメンガード！」
アーメンガード「（ビクッと）……」
　　アメリア、オロオロと、
アメリア「学校で出す食事では足りないの？」
アーメンガード「いえ……」
アメリア「じゃ、何なの？」
アーメンガード「……」
　　固く口を閉ざしている。
アメリア「（途方にくれて）お姉さま……」
ミンチン「（突然）わかりました、どうしても言わないのなら、それでも結構です」
アメリア「お姉さま、あの……」
ミンチン「アメリア」
アメリア「はい？」
ミンチン「アーメンガードを、今日一日、部屋から出さないように」

アメリア「(え？)」
ミンチン「それから、お昼の食事は、ぬきです」
アメリア「(思わず)お姉さま！それは、あんまり……」
言いかけるが、
ミンチン「(ピシリ)それぐらいのおしおきは当然です！」
アーメンガード――。
呆然となっている。

16 同・部屋の外

ドアに耳つけて立ち聞いていたジェシーと、ガートルードが、思わず顔見合せて――。

17 同・教室

バタバタとかけこむジェシーとガートルード。

ひとり本を読んでいたラビニア囲んで

ジェシー「とうとうおしおき受けることになったわよ」

ラビニア「おしおき？」

ジェシー「アーメンガードよ、お昼のお食事はぬきですって」

ガートルード「その上、今日一日は、部屋から一歩も出ちゃいけないって」

ジェシー「どうしても、パンを拾った訳を言わないで、ミンチン先生をすっかり怒らしちゃったのよ」

ガートルード「どうして言わないのかしら、あっさり白状しちゃえば、あんなひどいおしおき受けることもないのに」

ラビニア「（不機嫌に）そんなこと言える訳ないじゃない」

二　人「（え？）」

ラビニア「レディともあろうものが、人のもの欲しがるなんて、そんなみっともないことどうしていえるのよ」

ジェシー「でもさ、おなかすいてたのかも知れないし……」
ガートルード「（合づちで）あの子、太っちょだから……」
ラビニア「（吐きすてる）勉強だって出来ないのに、その上食べるものにまで汚ないなんて、この学校の恥よ！」
二人――。
何となくラビニアの顔色見て、口つぐんでしまう。
×　　×　　×
暖炉の灰を掃除していたベッキーの手が止まっている。
三人の話を聞いてしまったのだ。

18 同・台所

ジェームスに買いものの報告をしているセーラ。
セーラ「全部で二シリング八ペンスです」
ジェームス、品物と書きつけと、つり銭を調べ、

ジェームス「合ってるな、よし」

セーラ、おじぎをして、行こうとしたところへ、ベッキーが、灰かき道具もって、もどってくる。

ベッキー、セーラに気ずくなり、モリーと、ジェームスに気づかれないように、そっと呼ぶ。

ベッキー「（小声）お嬢さま……」

セーラ「（?）」

と、見て――。

19 同・部屋の外

「アーメンガードが、おしおきですって?!」

ベッキーに、思わず聞き返したセーラ。

セーラ「どうして?どうしてそんなことに……」

ベッキー「朝の食事の時に、残りもののパンをひろわれたんだそうで

す、それを、院長先生に見つかってしまって……」

セーラ「(呆然) どうして、そんなことを……」

ベッキー「(困って) さあ……院長先生にも、どうしても訳をおっしゃらないそうで、それで院長先生が、すっかり怒って、お食事ぬきで、お部屋に閉じこめるって言われたんだそうです」

セーラ「(思わず) そんな、ひどいことを……」

20

同・ラビニアたちの部屋

窓辺に、しょんぼり坐って、ぼんやり外を見ているアーメンガード。

他には、誰れもいない。

アーメンガード「……」

淋しさに、ポロッと涙がこぼれる。

ハッとしたような、セーラの声が、かぶる。

「メルチセデック！」

21　もとの台所の部屋の前

セーラとベッキー。

ベッキー「メルチセデック？」

セーラ「（自分の思いで）そうよ、メルチセデックのためなんだわ……」

ベッキー「（わからず）メルチセデックのためって……」

セーラ「可哀そうに、アーメンガード……どうしたら良いのかしら……

……」

ベッキーの存在も忘れたようにつぶやいているが、ふと、エプロンの下にかくしもっていた例のりんごに、気がつく。

りんごをとりだしたセーラ――。

じっと考えているが、

セーラ「そうだ！」

そして、きょとんとなっているベッキーに、

セーラ「ベッキー、ちょっと、ごめんなさい」

いそぎ、その場を離れる。

ベッキー「（驚いて）お嬢さま？」

セーラ「すぐ、帰るから」

何か言いかけるベッキーの言葉もまたずに、もう走りだしている。

ベッキー「（あ然と）お嬢さま……」

モリーが、顔だし、

モリー「いつまでおしゃべりしてるんだい！仕事は……」

どなりかけて、？となる。

モリー「セーラは？」

ベッキー「（困って）……」

22

ミンチン女学院・ラビニアたちの部屋の前

セーラきて、あたりを窺いながら、ソッとノックする。
待つ間もなしに、ドアがあき、アーメンガードが、涙にぬれた顔をのぞかせる。
そこに立っているセーラに、驚くアーメンガード。

アーメンガード「セーラ?!」
そして、あわてて周囲を見回す。
セーラ「(微笑で)大丈夫よ、今、みんなフランス語の授業中だから」
アーメンガード「ああ……でも……?」
けげんなアーメンガードに、もってきたりんごを差しだすセーラ。
セーラ「はい、これ」
アーメンガード「?」
セーラ「もぎたてのりんごよ」

23

同・中

アーメンガード「（え？となり）」
セーラ「ごめんなさい、私のため……いえ、メルチセデックのために、あなたにつらい思いをさせてしまって……」
アーメンガード「（思わず）セーラ――」
セーラ「これは、そのおわびよ」
アーメンガード――。
りんご、受けとって、言葉もないままに、あらたな涙があふれてくる。
アーメンガード「セーラ……」
セーラ「泣かないで、アーメンガード。それより、みんながもどってこないうちに、早く食べてちょうだい」
やさしく、言葉かけながらも、こみ上げてくる思いに、自分も泣いてしまうセーラ。

ひとり、りんごを食べるアーメンガード。

アーメンガード「（思わず）おいしい……」

涙で笑いで、顔中、くしゃくしゃになっている。

24

同・台所

かっかしているモリーの前で、小さくなっているセーラ。

モリー「全く、油断もスキもありゃしない、ちょっと目を離したら、すぐに仕事をさぼって、どっかへ雲がくれしちまうんだから……いったいどこへ行ってたんだよ」

セーラ「ごめんなさい……」

モリー「ごめんなさいじゃわからないよ！」

セーラ「……」

固く、口を閉ざしている。

モリー「本当にもう……今度こんなことがあったら、院長先生に言い

つけて、きつくおしおきをしてもらうからね！」

セーラ——。

耐えている。

×　　　×　　　×

モリーの看視のもと、床にはいつくばって掃除をしているセーラ。

だが、そのセーラの心は、明るい。

セーラのN「今日ほど、アーメンガードをかけがえのない親友だと思ったことはありませんでした。今頃、アーメンガードは……そう思うだけで、私まで仕事のつらいことなど、忘れてしまいそう……」

元気を出して床をみがくそんなセーラで——。

—つづく—